



お茶の水女子大学
Ochanomizu University

2022 REPORT

令和4事業年度に係る業務の実績に
関する報告書の概要について



【目次】

I. はじめに

II. 全ての定量的な評価指標の達成状況について

III. 各分野の取組について

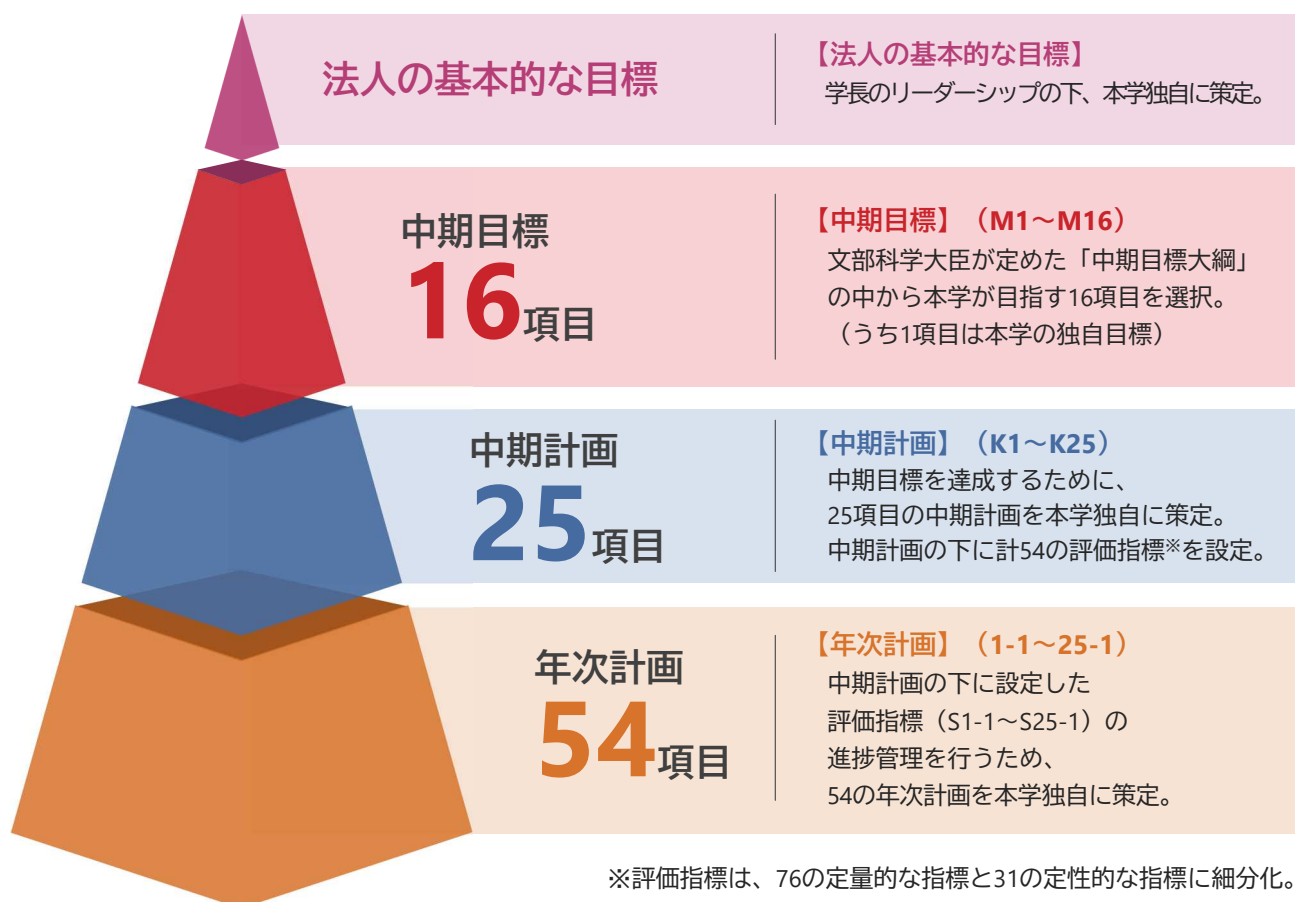
【I.はじめに】

この項目では、本学の第4期中期目標・中期計画の全体像、及びこれらの目標・計画を踏まえて作成した「令和4年次計画」の概要や、令和4年度に発足した4機構・10研究所の概要について記載しています。

【I.はじめに】

1. 本学の第4期中期目標・中期計画

【お茶の水女子大学の第4期中期目標・中期計画の体系図】



【令和4年次計画54項目 全体の自己評価結果】

区分	判定	件数
【iii】	達成水準を大きく上回っている	11件
【ii】	達成水準を満たしている	37件
【i】	達成水準を満たしていない	6件

※令和4年次計画の自己評価は、上記の三段階の区分によって判定を行っています。

※各計画の自己評価結果の詳細については、別添の令和4事業年度に係る業務の実績に関する報告書を参照願います。

【I.はじめに】

2. 令和4年次計画及び実績の概要

法人の基本的な目標（第4期中期目標・中期計画前文）

ミッション：学ぶ意欲のあるすべての女性にとって、真摯な夢の実現の場として存在する。

ビジョン：「総合知を持ち社会を革新する人材の養成」「持続可能な社会実現のための研究推進」
「女性が活躍できる社会の実現」

教育【26計画】

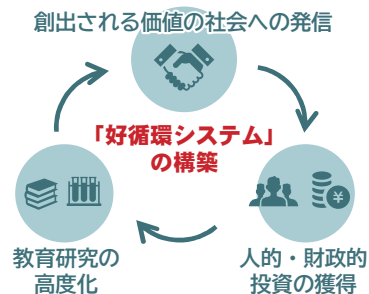
- 総合知開発研究機構の取組
- 共創工学部設置に向けた取組
- 入試に関する取組
- 学部・大学院教育の充実
- 国際交流に関する取組

附属学校【2計画】

- 大学と附属学校園の連携強化
- 総合知育成モデルの探究
- お茶の水女子大附属学校園教材・論文データベースを通じた成果発信

社会との共創【9計画】

- グローバル女性リーダー育成研究機構の取組
- ヒューマンライフィノベーション開発研究機構の取組
- サステナブル社会実装機構の取組



研究【3計画】

- 女性教員比率・女性教授比率の維持・向上
- 多様な研究者への支援
- クロスアポイントメント制度を活用した研究者交流

業務運営【14計画】

- ステークホルダーとの共創
- 施設マネジメント
- 大学の自己収入の強化
- 自己点検・評価体制の確立
- 業務の効率化・高度化

第4期中期目標期間（令和4～9年度）の初年度である令和4年度においては、上記の構想・取組を加速させるため、**学長のリーダーシップに基づき連携機関を拡大**

令和4年度に協定等を締結・更新した主な事例



【I.はじめに】

3. 令和4年度に発足した4機構・10研究所の概要（価値創造プロセス）（1/2）

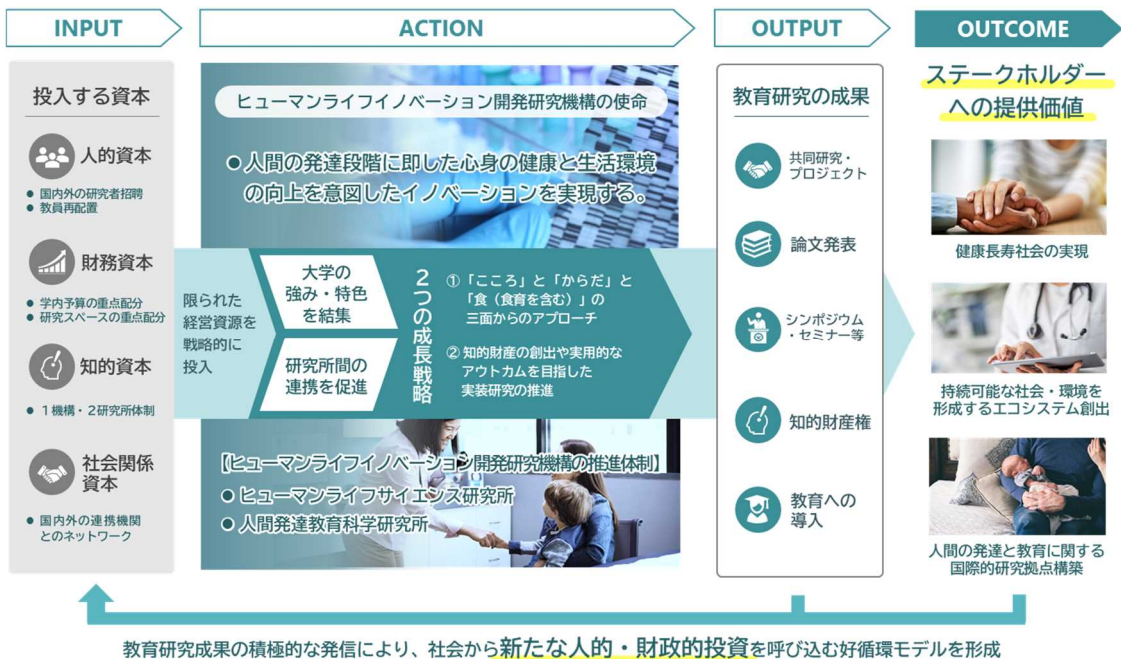
① グローバル女性リーダー育成研究機構 関連計画：1-1、1-2

（グローバルリーダーシップ研究所、ジェンダー研究所、ジェンダード・イノベーション研究所）



② ヒューマンライフイノベーション開発研究機構 関連計画：2-1

（ヒューマンライフサイエンス研究所、人間発達教育科学研究所）



【I.はじめに】

3. 令和4年度に発足した4機構・10研究所の概要 (価値創造プロセス) (2/2)

③サステナブル社会実装機構 関連計画：3-1～3-5
(SDGs研究所、湾岸生物教育研究所)



④総合知開発研究機構 関連計画：5-1～5-3、6-1、7-1、8-1

(コンピテンシー育成開発研究所、理系女性育成啓発研究所、サイエンス&エデュケーション研究所)



【目次】

I. はじめに

II. 全ての定量的な評価指標の達成状況について

III. 各分野の取組について

【II.全ての定量的な評価指標の達成状況について】

この項目では、本学の第4期中期計画に設定された54の評価指標（S1-1~S25-1）について、76の定量的な評価指標と、31の定性的な評価指標に細分化したうえで、全76の定量的な評価指標の達成状況について記載しています。定性的な評価指標の達成状況については、別添の令和4事業年度に係る業務の実績に関する報告書を参照願います。

Ⅱ. 全ての定量的な評価指標の達成状況について(1/5)



【凡例】 ■：社会との共創に関する目標・計画 ■：教育に関する目標・計画 ■：研究に関する目標・計画
 ■：附属学校に関する目標・計画 ■：業務運営に関する目標・計画
 ※ 黄色数字の評価指標については、年度毎の目標値を順調に達成していることを示す。

<p>(1)評価指標【S1-1】</p>  <p>ジェンダー・イノベーション研究所における共同研究・プロジェクト数</p> <p>10件/年 (目標：R4～R9で計6件)</p>	<p>(2)評価指標【S1-1】</p>  <p>ジェンダー・イノベーション研究所における論文発表数</p> <p>1本/年 (目標：R4～R9で計20本)</p>	<p>(3)評価指標【S1-1】</p>  <p>ジェンダー・イノベーション研究所における知的財産権の申請件数</p> <p>0件/年 (目標：R4～R9で計2件)</p>	<p>(4)評価指標【S1-1】</p>  <p>ジェンダー・イノベーション研究所における起業支援の件数</p> <p>0件/年 (目標：R4～R9で計2件)</p>
<p>(5)評価指標【S1-2】</p>  <p>ジェンダー研究所及びグローバルリーダーシップ研究所における共同研究・プロジェクト数</p> <p>12件/年 (目標：毎年度5件)</p>	<p>(6)評価指標【S1-2】</p>  <p>ジェンダー研究所及びグローバルリーダーシップ研究所における国内外からの研究者招聘数</p> <p>20名/年 (目標：毎年度10名)</p>	<p>(7)評価指標【S1-2】</p>  <p>ジェンダー研究所及びグローバルリーダーシップ研究所におけるシンポジウム等開催数</p> <p>19件/年 (目標：毎年度8件)</p>	<p>(8)評価指標【S1-2】</p>  <p>ジェンダー研究所及びグローバルリーダーシップ研究所における論文発表数</p> <p>14本/年 (目標：R4～R9で計60件)</p>
<p>(9)評価指標【S2-1】</p>  <p>ヒューマンライフイノベーション開発研究機構における共同研究・プロジェクト数、外部資金獲得額</p> <p>33件・1.4億円/年 (目標：R4～R9平均26件・6千万円)</p>	<p>(10)評価指標【S3-1】</p>  <p>THEインパクトランキングのうちSDG5の順位</p> <p>201-300位(2023) (目標：R9までに600位以内)</p>	<p>(11)評価指標【S3-3】</p>  <p>SDGs推進研究所における共同研究・プロジェクト数、外部資金獲得額</p> <p>2件・350万円/年 (目標：R4～R9で計12件・3千万円)</p>	<p>(12)評価指標【S3-3】</p>  <p>SDGs推進研究所における知的財産権の申請件数</p> <p>0件/年 (目標：R4～R9で計3件)</p>
<p>(13)評価指標【S3-4】</p>  <p>湾岸生物教育研究所におけるオーダーメイド型臨海実習の実施数</p> <p>11回・129名/年 (目標：R4～R9平均6回・80名)</p>	<p>(14)評価指標【S3-4】</p>  <p>湾岸生物教育研究所における公開臨海実習の実施数</p> <p>14大学・32名/年 (目標：R4～R9平均14大学・20名)</p>	<p>(15)評価指標【S3-4】</p>  <p>湾岸生物教育研究所における高校生等を対象とした実習等の実施数</p> <p>12回・309名/年 (目標：R4～R9平均10回・250名)</p>	<p>(16)評価指標【S3-4】</p>  <p>湾岸生物教育研究所における海産バイオリソースの提供数</p> <p>225機関・18,131名/年 (目標：R4～R9平均100機関・1万名)</p>

Ⅱ. 全ての定量的な評価指標の達成状況について(2/5)





【凡例】 ■：社会との共創に関する目標・計画 ■：教育に関する目標・計画 ■：研究に関する目標・計画
 ■：附属学校に関する目標・計画 ■：業務運営に関する目標・計画

※ 黄色数字の評価指標については、年度毎の目標値を順調に達成していることを示す。

<p>(17)評価指標【S3-5】</p>  <p>湾岸生物教育研究所 における論文数</p> <p>14本/年 (目標：R4～R9平均10本)</p>	<p>(18)評価指標【S3-5】</p>  <p>湾岸生物教育研究所 における学会発表数</p> <p>21件/年 (目標：R4～R9平均10件)</p>	<p>(19)評価指標【S4-1】</p>  <p>アジア・アフリカ の教育者・行政官 等に対する研修の 受講者数</p> <p>11名/年 (目標：R4～R9で計55名)</p>	<p>(20)評価指標【S5-2】</p>  <p>理系女性育成啓発 研究所における シンポジウム・ セミナー等の 参加者数</p> <p>1,522名/年 (目標：R4～R9平均800名)</p>
<p>(21)評価指標【S5-2】</p>  <p>理系女性育成啓発 研究所が実施する アンケート調査に おける理工系分野 への関心</p> <p>95%/年 (目標：R4～R9平均70%)</p>	<p>(22)評価指標【S5-3】</p>  <p>サイエンス& エデュケーション 研究所が実施する 理数教育の実践数 (自治体・学校)</p> <p>32件・112校/年 (目標：R4～R9平均25件・105校)</p>	<p>(23)評価指標【S5-3】</p>  <p>サイエンス& エデュケーション 研究所が開発する コンテンツのDL数</p> <p>664件/年 (目標：R4～R9平均540件)</p>	<p>(24)評価指標【S6-1】</p>  <p>コンピテンシー 育成支援システム を活用する学生 の割合</p> <p>— (R7年度開始予定) (目標：R9までに70%)</p>
<p>(25)評価指標【S7-1】</p>  <p>キャリア支援・ キャリア相談の 利用者数</p> <p>延べ4,120名/年 (目標：毎年度延べ3,360名)</p>	<p>(26)評価指標【S8-1】</p>  <p>日本文化(伝統芸能) に関するセミナー・ シンポジウム開催数</p> <p>3件/年 (目標：R4～R9平均3件)</p>	<p>(27)評価指標【S8-1】</p>  <p>日本文化(伝統芸能) に関するセミナー・ シンポジウムの 参加者の満足度</p> <p>100%/年 (目標：R4～R9平均80%)</p>	<p>(28)評価指標【S8-2】</p>  <p>グローバル女性 リーダー育成に 関する科目及び キャリアデザイン 科目の履修者数</p> <p>延べ461名/年 (目標：R4～R9平均450名)</p>
<p>(29)評価指標【S9-1】</p>  <p>共創工学部(仮称) の志願者倍率</p> <p>— (R6年度入試より開始) (目標：毎年度3倍)</p>	<p>(30)評価指標【S9-1】</p>  <p>共創工学部(仮称) における教育の 総合満足度</p> <p>— (R6年度開始予定) (目標：毎年度70%)</p>	<p>(31)評価指標【S10-1】</p>  <p>リベラルアーツ科目 と複数プログラム 選択履修制度に 対する満足度</p> <p>LA科目99.1%/複プロ86.6% (目標：毎年度70%)</p>	<p>(32)評価指標【10-2】</p>  <p>数理・データ サイエンス・AI教育 プログラムの 履修者数</p> <p>延べ185名/年 (目標：R4～R9平均延べ130名)</p>

Ⅱ. 全ての定量的な評価指標の達成状況について(3/5)

【凡例】 ■：社会との共創に関する目標・計画 ■：教育に関する目標・計画 ■：研究に関する目標・計画
 ■：附属学校に関する目標・計画 ■：業務運営に関する目標・計画
 ※ 黄色数字の評価指標については、年度毎の目標値を順調に達成していることを示す。

<p>(33)評価指標【S10-2】</p>  <p>数理・データサイエンス・AI教育プログラムにおけるリテラシーレベル修了者数</p> <p>14名/年 (目標：R4～R9で計300名)</p>	<p>(34)評価指標【S10-2】</p>  <p>アントレプレナー育成のための授業の履修者数</p> <p>延べ98名/年 (目標：毎年度延べ35名)</p>	<p>(35)評価指標【S11-2】</p>  <p>附属高校生の大学授業の受講者数</p> <p>延べ83名/年 (目標：R4～R9で延べ360名)</p>	<p>(36)評価指標【S12-1】</p>  <p>学士・修士一貫トラック修了生</p> <p>18名/年 (目標：R4～R9で計27名)</p>
<p>(37)評価指標【S12-1】</p>  <p>大学院副専攻プログラム履修者数</p> <p>48名/年 (目標：R4～R9で計435名)</p>	<p>(38)評価指標【S12-2】</p>  <p>博士前期課程学生のインターンシップ派遣企業数・人数</p> <p>33件・27名/年 (目標：R4～R9平均13件・20名)</p>	<p>(39)評価指標【S13-1】</p>  <p>お茶大アカデミックプロダクション大学院フェローシップの採用学生数</p> <p>6名/年 (目標：毎年度6名)</p>	<p>(40)評価指標【S13-2】</p>  <p>自主協働研究科目(PBTS I・II)の履修者数</p> <p>8名/年 (目標：R4～R9平均7名)</p>
<p>(41)評価指標【S13-2】</p>  <p>博士後期課程の教育プログラムから派生した産学官連携件数</p> <p>1件/年 (目標：R4～R9で計3件)</p>	<p>(42)評価指標【S13-2】</p>  <p>博士後期課程の教育プログラムから派生したシンポジウム・ワークショップ等の件数</p> <p>2件/年 (目標：R4～R9で計3件)</p>	<p>(43)評価指標【S13-2】</p>  <p>博士後期課程の教育プログラムから派生した知的財産権の申請件数</p> <p>2件/年 (目標：R4～R9で計3件)</p>	<p>(44)評価指標【S14-1】</p>  <p>社会人女性のためのリカレント講座の受講者数</p> <p>延べ361名/年 (目標：R4～R9平均120名)</p>
<p>(45)評価指標【S15-1】</p>  <p>海外大学との大学間交流協定締結数</p> <p>90大学(R5.3末) (目標：R9までに100大学)</p>	<p>(46)評価指標【S15-2】</p>  <p>学部卒業時に留学経験を持つ学生の比率</p> <p>21.6%/年 (目標：R4～R9平均24%)</p>	<p>(47)評価指標【S15-3】</p>  <p>学部卒業時に外国語カスタンダードを達成する学生の比率</p> <p>18.5%/年 (目標：R4～R9平均20%)</p>	<p>(48)評価指標【15-4】</p>  <p>国際交流プログラムの件数・受講学生数(本学学生)</p> <p>23件・延べ563名/年 (目標：R4～R9平均12件・243名)</p>

Ⅱ. 全ての定量的な評価指標の達成状況について(4/5)

【凡例】 ■：社会との共創に関する目標・計画 ■：教育に関する目標・計画 ■：研究に関する目標・計画
 ■：附属学校に関する目標・計画 ■：業務運営に関する目標・計画

※ 黄色数字の評価指標については、年度毎の目標値を順調に達成していることを示す。

<p>(49)評価指標【S16-1】</p>  <p>外国人留学生 同窓会の会員数</p> <p>470名(R5.3末) (目標：R9までに450名)</p>	<p>(50)評価指標【S16-2】</p>  <p>全学生に占める 外国人留学生比率</p> <p>10.1%/年 (目標：R4～R9平均14%)</p>	<p>(51)評価指標【S16-3】</p>  <p>外国語で開講 する授業数</p> <p>142科目/年 (目標：R4～R9平均110科目)</p>	<p>(52)評価指標【S16-4】</p>  <p>国際交流プログラム の件数・受講学生数 (外国人学生)</p> <p>18件・延べ467名/年 (目標：R4～R9平均3件・135名)</p>
<p>(53)評価指標【S17-1】</p>  <p>学生懇談会 実施数</p> <p>2回/年 (目標：R4～R9平均2回)</p>	<p>(54)評価指標【S17-1】</p>  <p>新学生宿舎における 意見交換会実施数</p> <p>2回/年 (目標：R4～R9平均2回)</p>	<p>(55)評価指標【S18-1】</p>  <p>全教員に占める 女性教員の比率</p> <p>44.8%/年 (目標：R4～R9平均40%)</p>	<p>(56)評価指標【S18-1】</p>  <p>教授職に占める 女性教員の比率</p> <p>35.5%/年 (目標：R4～R9平均30%)</p>
<p>(57)評価指標【S18-2】</p>  <p>本学独自の 研究支援3計画を 利用した研究者数</p> <p>延べ37名/年 (目標：R4～R9平均延べ31名)</p>	<p>(58)評価指標【S18-3】</p>  <p>クロスアポイント メント制度利用者 数(本学採用者)</p> <p>2名/年 (目標：R9時点で10名)</p>	<p>(59)評価指標【S19-1】</p>  <p>附属学校園教材・ 論文データベース の記載件数・ 利用者数</p> <p>79件・2,845名/年 (目標：R4～R9平均52件・1,500名)</p>	<p>(60)評価指標【S19-1】</p>  <p>附属学校園における シンポジウム・ セミナー等実施数</p> <p>7件/年 (目標：R4～R9平均4件)</p>
<p>(61)評価指標【S19-1】</p>  <p>附属学校園における 教育実習生の受入数</p> <p>102名/年 (目標：R4～R9平均100名)</p>	<p>(62)評価指標【S19-2】</p>  <p>附属学校園における インターンシップ 受入数</p> <p>39名/年 (目標：R4～R9平均35名)</p>	<p>(63)評価指標【S19-2】</p>  <p>附属学校園を活用した 大学教員のFD件数</p> <p>4回/年 (目標：R4～R9平均3回)</p>	<p>(64)評価指標【19-2】</p>  <p>FDを通じて大学と 附属学校の連携に 関する意識向上及び 授業改善に活かすこ うができたとする割合</p> <p>86%/年 (目標：R4～R9平均80%)</p>

Ⅱ. 全ての定量的な評価指標の達成状況について(5/5)

【凡例】 ■：社会との共創に関する目標・計画 ■：教育に関する目標・計画 ■：研究に関する目標・計画
 ■：附属学校に関する目標・計画 ■：業務運営に関する目標・計画

※ 黄色数字の評価指標については、年度毎の目標値を順調に達成していることを示す。

<p>(65)評価指標【S20-1】</p>  <p>経営協議会 開催数</p> <p>4回/年 (目標：R4～R9平均4回)</p>	<p>(66)評価指標【S20-1】</p>  <p>学長特別顧問など 有識者と学長及び 法人執行部との 話し合いの場の数</p> <p>4回/年 (目標：R4～R9平均4回)</p>	<p>(67)評価指標【S20-2】</p>  <p>経営協議会の 学外委員からの提言 の中で法人経営や 大学改革ビジョン に活用した数</p> <p>4件/年 (目標：R4～R9平均4件)</p>	<p>(68)評価指標【S21-1】</p>  <p>役職者全体に 占める女性の比率</p> <p>44.7%/年 (目標：R4～R9平均35%)</p>
<p>(69)評価指標【S21-1】</p>  <p>経営協議会委員に 占める女性の比率 (学外委員)</p> <p>50.0%/年 (目標：R4～R9平均35%)</p>	<p>(70)評価指標【S22-1】</p>  <p>CO2排出量の 低減率</p> <p>対R2比66.4%減/年 (目標：R9までに対R2比8%減)</p>	<p>(71)評価指標【S23-1】</p>  <p>大学の自己収入額 1)寄附金収入 2)受託研究等収入 3)その他収入の合計</p> <p>21.3億円/年 (目標：R4～R9平均12.7億円)</p>	<p>(72)評価指標【S23-2】</p>  <p>機能強化すべき 組織、取組に 対する予算配分額</p> <p>3.5億円/年 (目標：毎年度3.5億円)</p>
<p>(73)評価指標【S24-4】</p>  <p>教員個人活動評価 における 定量的評価の 素点実績</p> <p>187.6点/年 (目標：R9までに201点)</p>	<p>(74)評価指標【S24-4】</p>  <p>THE日本大学 ランキング における順位</p> <p>32位/年 (目標：毎年度25位)</p>	<p>(75)評価指標【S25-1】</p>  <p>デジタル化された 業務の数</p> <p>12件/年 (目標：R9までに計15件)</p>	<p>(76)評価指標【S25-2】</p>  <p>情報セキュリティ 向上のための 研修の実施回数</p> <p>3回/年 (目標：毎年度2回)</p>

総評：76の定量的な評価指標のうち約60の指標が順調に達成・進捗。

- 達成・進捗が遅れている指標の対応・改善策については本資料26～27頁参照（全8項目）。
- 定性的な評価指標の達成状況については、別添の令和4事業年度の業務の実績に関する報告書を参照。

【目次】

I. はじめに

II. 全ての定量的な評価指標の達成状況について

III. 各分野の取組について

【Ⅲ.各分野の取組について】

この項目では、各分野（カテゴリー）ごとに、令和4年次計画に沿って実施した取組のうち、特色ある取組を抜粋して記載しています。なお、各計画の達成状況の自己評価については、以下の三段階（i～iii）の区分によって行っています。

【iii】達成水準を大きく上回っている

【ii】達成水準を満たしている

【i】達成水準を満たしていない

【Ⅲ. 各分野の取組】

1. 総務・理系女性育成・創立150周年事業(1/2)

R4実績 の概要

- 初等中等教育における女性の理系進路選択に向けた取組を促進。
- 他大学等のモデルとなるべく、政府目標よりも高い女性役職者比率（44.7%）を維持。
- 大学の自己収入は、目標値を大きく上回る約21.3億円。

（1）理系女性育成啓発研究所における取組（年次計画5-2）

【シンポジウム・セミナーの開催】

- 女子中高生やその保護者を対象とする「リケジョ-未来シンポジウム」や、JST事業の女子中高生の理系進路選択支援プログラムを通じた「フロントランナーセミナー」等を開催した。令和4年度に開催したシンポジウム・セミナーは計28件、参加者は**1,522名（目標値800名）**であった。また、各イベントの参加者を対象としたアンケートの満足度は**95%（目標値80%）**であった。

【附属学校園との連携】

- 附属中学校及び附属高等学校と連携して、企業見学会を実施（3回）し、イノベーションを支える産業やSDGsの達成に挑むプログラムへの理解促進が図られた。また附属幼稚園保護者を対象に保護者がサイエンスに親しむ機会を提供することを目的に「サイエンス研修会」を実施した。



- 研究所HPや刊行物等を通じて、取組を広く発信。

自己評価

評価結果 【iii】（達成水準を大きく上回っている）

【理由】シンポジウム・セミナーの参加者、及びアンケート満足度が目標値を大きく上回るとともに、「女子中高生のためのイノベーション入門編」を新たに作成・公表する等、広報・啓発活動を強化できたため。

（2）高い女性役職者比率の維持・向上（年次計画21-1）

【女性役職者比率：35%の達成】

- 本学のミッション・ビジョンの実現に向け、女性の視点を取り入れた法人運営・法人経営を推進するため、学長が主催する教員人事会議において新規採用の際に女性教員を積極的に採用するよう周知した他、学長や理事を補佐する役職（学長補佐、副理事）に女性を積極的に登用することで次世代の女性管理職の育成に取り組んだ。こうした取組により、令和4年度の女性役職者比率は**44.7%（目標値35%）**となった。また、**経営協議会委員（学外委員）の女性比率は50%（目標値35%）**となった。

【更なる比率の向上を目指して】

- 令和5年3月に「お茶の水女子大学人事に関する方針」及び「次世代育成対策及び女性活躍推進対策行動計画」を策定し、ダイバーシティを尊重し、多様な働き方が可能となる職場の環境づくりに取り組んでいくこととした。

政府目標：指導的地位に占める女性の割合が2020年代の可能な限り早期に30%程度となるよう目指す。
（第5次男女共同参画基本計画(R2.12.25)）



本学の女性
役職者比率
44.7%
(R3：34.8%)

本学の経営協議会
学外委員の女性比率
50.0%
(R3：50.0%)

自己評価

評価結果 【iii】（達成水準を大きく上回っている）

【理由】女性役職者比率、経営協議会委員の女性比率ともに目標値を大きく上回ったため。

【Ⅲ. 各分野の取組】

1. 総務・理系女性育成・創立150周年事業(2/2)

(3) 施設マネジメント (年次計画22-2)

- キャンパスマスタープラン2021に基づく施設マネジメントとして、文教育学部1号館（I期）改修工事を実施し、令和4年6月末から工事に着手し、令和5年2月末に完成した。また、全学的に電気の契約をCO2が発生しない電力に切り替えたことから、令和4年度のキャンパス全体のCO2排出量は1,108t-co2（基準値であるR2年度：3,110t-co2から66.4%減）となった。さらに、令和4年度に開設した理学部1号館のオープンラボにスペースチャージを導入した。

キャンパスマスタープラン2021に基づく施設マネジメント

ファシリティマネジメント

エネルギーマネジメント

スペースマネジメント



■ 文教育学部1号館（I期）改修工事



■ CO2排出量66.4%削減（対目標値）



■ オープンラボにスペースチャージ導入

自己評価

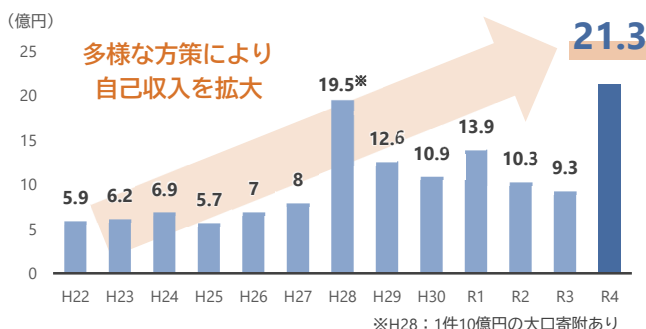
評価結果【ii】（達成水準を満たしている）

【理由】 キャンパスマスタープラン2021に基づく施設マネジメントを予定どおり進捗させることができたため。

(4) 安定的な財務基盤の確立に向けた取組 (年次計画23-1)

- 安定的な財務基盤の確立に向けて、東村山郊外園の土地の一部売却（令和4年4月、売却額約9億円）や、東京都板橋区の国際学生宿舍跡地への定期借地権の設定（令和4年度地代収入2,591万円）等、保有資産の積極的な活用を推進した他、令和7年度に本学が創立150周年を迎えるにあたって記念基金を設立し、募金活動を推進した。また、内閣府「国立大学イノベーション創出環境強化事業」を活用して、多様な民間資金獲得に向けた取組を推進した結果、令和4年度の大学の自己収入（寄附金等収入・受託研究等収入・その他収入の合計）は、21.3億円/年（目標値12.5億円）となる成果を上げた。

■大学の自己収入の推移（H22-R4）



令和5年度以降の更なる自己収入拡大に向けて



創立150周年記念募金
による寄附金収入の強化



同窓会館跡地の
活用方法の検討

自己評価

評価結果【iii】（達成水準を大きく上回っている）

【理由】 自己収入の目標値を大きく上回ったため。

【Ⅲ. 各分野の取組】

2. 教育改革・入試改革・工学系学部設置(1/2)

R4実績 の概要

- 特色ある教育プログラムにより、様々な分野で活躍する女性リーダーを育成。
- 令和6年度の共創工学部（仮称）の設置に向けた取組を推進。
- 総合型選抜「新フンボルト入試」により、伸びしろのある学生を獲得。

（1）統合データベース構築に向けた取組、及びキャリア支援の取組（年次計画7-1）

【統合データベースの構築に向けた取組】

- 教学IR・教育開発・学修支援センターを中心に、令和4年11月から、教学に関する統合データベースの構築について検討を開始し、関係各課で保有しているデータ等についてヒアリングを行った。統合データベースについては、令和5年度末までに構築完了予定である。

【キャリア支援の取組】

- 学生・キャリア支援センターを中心に、近年の学生の就職活動の早期化等に対応したキャリア支援行事やキャリア相談等の取組を行った。こうした取組により、令和4年度のキャリア支援行事の参加者・キャリア相談の利用者は延べ4,120名（目標値3,360名）となった。



自己評価

評価結果【iii】（達成水準を大きく上回っている）

【理由】学生・キャリア支援センターが実施するキャリア支援行事の参加者・キャリア相談の利用者が目標値を大きく上回ったため。

（2）共創工学部（仮称）の設置に向けた取組（年次計画9-1）

- 令和6年度の共創工学部（仮称）（①人間環境工学科（仮称）、②文化情報工学科（仮称））の設置に向けて、工学系学部設置準備委員会を中心に設置構想の検討を進め、学内諸会議における審議・報告を経て、令和5年3月17日に設置申請書類を文部科学省に提出した。

自己評価

評価結果【ii】（達成水準を満たしている）

【理由】共創工学部（仮称）の設置に向けた取組が予定どおり進捗しているため。

（3）数理・データサイエンス・AI教育、及びアントレプレナーシップ教育（年次計画10-2）

【数理・データサイエンス・AI教育】

- 令和4年度より文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育の全国展開の推進」特定分野校に認定されており、関連科目の履修者は延べ185名（目標値130名）となった。一方で、リテラシーレベル修了者数は14名（目標値50名）に留まった。

【アントレプレナーシップ教育】

- 令和3年度に文部科学省「デジタルと専門分野の掛け合わせによる産業DXをけん引する高度専門人材育成事業」に採択されたことを踏まえ、アントレプレナーシップ関連科目を増設し、関連科目の履修者は98名（目標値35名）となった。

学生の成果について



- アントレプレナーシップ関連科目「総合コース」の履修者により編成された学生チームが、第13回ビジネス創造コンテスト（主催：一般財団法人品川ビジネスクラブ、共催：品川区）において、ファイナリスト賞、品川区特別賞を受賞。（受賞したビジネスアイデア：シチュエーションまで試着するmy試着室）

自己評価

評価結果【ii】（達成水準を満たしている）

【理由】年次計画の各目標値の達成状況（2/3達成）を総合的に勘案したため。

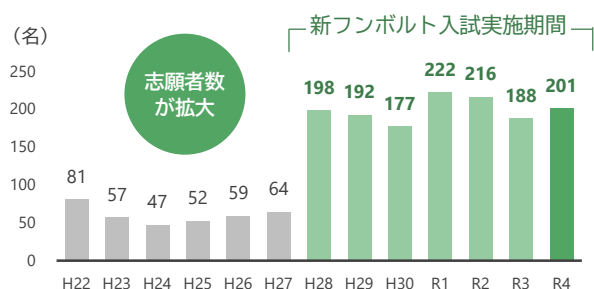
【Ⅲ. 各分野の取組】

2. 教育改革・入試改革・工学系学部設置(2/2)

(4) 総合型選抜「新フンボルト入試」(年次計画11-1)

- 第3期中期目標期間より継続して総合型選抜「新フンボルト入試」を実施し、一次選考の一環をなすプレゼミナールには、355名(R3:257名)が参加した。志願者数は文系が121名(R3:115名)、理系が80名(R3:73名)の計201名(R3:188名)となり、令和3年度と同程度の水準を確保した。プレゼミナールや入試の事後アンケートにおいても高い満足度が示されており、単なる入学者選抜ではなく、挑んだことで何かが得られるという新フンボルト入試の理念が実現されている。

■総合型選抜(旧AO入試)志願者数の推移(H22-R4)



自己評価

評価結果【ii】(達成水準を満たしている)

【理由】新フンボルト入試に関する取組を予定どおり実施するとともに、各種アンケート調査等においても高い満足度が示されたため。

(5) 博士後期課程学生への支援(年次計画13-1)

- 文部科学省「科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業」(令和3年度)に採択されたことを踏まえ設置した「お茶大アカデミック・プロダクション大学院生フェローシップ」(年額200万円支給)について、令和4年度は6名(目標値6名)の学生を採用した。また、支援を受けた学生の成果について調査を行い、研究活動等が順調に進捗していることを確認した。

自己評価

評価結果【ii】(達成水準を満たしている)

【理由】お茶大アカデミック・プロダクション大学院生フェローシップによる支援を行うとともに、支援を受けた学生の研究活動等が順調に進捗していることを確認したため。

(6) 学生の意見・要望を踏まえた学生サービスの改善に向けた取組(年次計画17-1)

- 令和4年度は学生懇談会を2回(R4.11、R5.2)開催し、学長や理事・副学長、関係する課の職員等と学生代表者による意見交換を行い、今後の学生サービスの改善等に活かしていくこととした。なお、学生から寄せられた意見と大学の対応状況については、大学ウェブサイトにおいて広く公表している。
- 令和4年4月より開寮した新学生宿舍「音羽館」の代表者と教育担当副学長、関係職員による意見交換会を年2回(R4.4、R4.11)開催し、学生から寄せられた意見を今後の寮生活の充実に活かしていくこととした。

学生懇談会の意見を学生サービスの改善に反映させた事例

【事例①小石川寮の入寮条件の見直し】学生からの要望を踏まえ、R6.4より外国人留学生も入寮可能となるよう対応。

【事例②無線アクセスポイントの増強】学生からの要望を踏まえ、Zoom等で活用する無線アクセスポイントを増強。



■ 学生懇談会(R4.11)には学長と全理事・副学長が出席。

自己評価

評価結果【ii】(達成水準を満たしている)

【理由】学生懇談会、及び新学生宿舍「音羽館」に入居している学生との意見交換会を年2回開催し、学生サービスの改善に向けた取組を実施できているため。

【Ⅲ. 各分野の取組】

3. 研究・国際交流・男女共同参画(1/2)

R4実績の概要

- 各研究所において、社会との共創を目指した特色ある研究・産学連携の取組を推進。
- 男女共同参画の観点に立ったリカレント教育を推進。
- 国際交流の推進に向けて連携機関を拡大。文部科学省「大学の世界展開力事業」に採択。

(1) ジェンダード・イノベーション研究所における取組 (年次計画1-1)

【キックオフシンポジウム】

- 令和4年6月に「ジェンダード・イノベーション研究所 設立記念キックオフシンポジウム—新たな産官学連携の創生に向けて—」(参加者534名)を開催し、産学官の各界から来賓、講演者、パネリストを招聘し、産学官連携によるジェンダード・イノベーション推進を、本学がハブ組織となって主導する姿勢をアピールした。

【共同研究・プロジェクトの推進】

- 令和4年度は、(株)日立コンサルティングとの共同研究プロジェクトや、富士通(株)との社会連携講座、内閣府「国立大学イノベーション創出環境強化事業」の事業経費を活用したプロジェクト等、計10件(目標値: R4~9年度で計6件)の共同研究・プロジェクトを実施した。

【ジェンダード・イノベーション研究の教育への導入】

- 研究成果の教育への導入を目指し、IGIセミナー・IGI学生セミナーを開催し、計5回のセミナーに延べ166名の学生が参加した。本取組の成果を、今後の起業支援等に活用していくこととした。



■キックオフシンポジウム (R4.6) には野田聖子内閣府特命担当大臣をはじめとする来賓、後援者、パネリストを招聘。



■富士通(株)と「富士通・お茶の水女子大学 AI倫理社会連携講座」(R5.3.1~R8.3.31)を設置。

自己評価

評価結果【iii】(達成水準を大きく上回っている)

【理由】ジェンダード・イノベーション研究所における共同研究・プロジェクトの件数が目標値を大きく上回ったため。

(2) グローバルリーダーシップ研究所、及びジェンダー研究所における取組 (年次計画1-2)

- グローバルリーダーシップ研究所、及びジェンダー研究所において、12件(目標値5件)の共同研究・プロジェクト、20名(目標値10名)の研究者招聘、19件(目標値8件)のシンポジウム・セミナー・ワークショップ開催、14本(目標値10本)の論文発表等の成果を上げた。
- 令和5年2月に開催した女性学長サミット「私たちの歩んだ道、歩む道—女性リーダーシップの新時代を拓く」(参加者453名)においては、本学佐々木学長と本学出身の学長6名(1名はビデオメッセージによる参加)が一堂に会し、新時代における女性リーダーに望ましい特性などについて議論が交わされた。



■女性学長サミットの集合写真 (R5.2)

自己評価

評価結果【iii】(達成水準を大きく上回っている)

【理由】全ての目標値を大きく上回ったため。

【Ⅲ. 各分野の取組】

3. 研究・国際交流・男女共同参画(2/2)

(3) ヒューマンライフィノベーション開発研究機構における取組 (年次計画2-1)

- ヒューマンライフィノベーション開発研究機構において、「こころ(人間発達教育科学研究所)とからだ(ヒューマンライフサイエンス研究所)の健康」を増進維持するために、令和4年度から「食」に焦点を当て、両研究所が連携した研究を推進するとともに、企業・研究機関と連携して実用的なアウトカムを目指した実装研究を進めた。
- これらの取組により、令和4年度の同機構の外部資金獲得実績は33件・約1.4億円(目標30件・6,000万円)となった。



自己評価

評価結果【ii】(達成水準を満たしている)

【理由】外部資金獲得に関する各目標値を上回ったため。

(4) 社会人女性のためのリカレント教育 (年次計画14-1)

- 令和4年度は、「お茶大女性リーダー育成塾：徽音塾」では延べ230名、「社会連携講座女性活躍促進連携講座」では延べ17名、「保育・子育て支援ラーニングプログラム」では延べ114名の社会人女性が受講し、これらの受講者の総計は361名(目標値120名)となった。
- また、徽音塾受講生アンケートにおいて、受講効果自覚：47.8%(目標値30%)、満足度：69.0%(目標値50%)の成果を得た。

自己評価

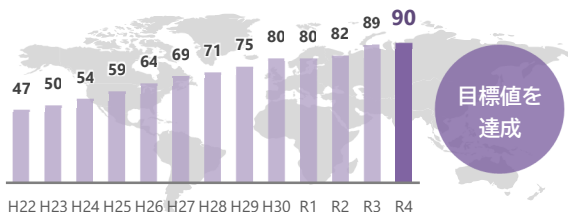
評価結果【iii】(達成水準を大きく上回っている)

【理由】社会人女性のためのリカレント教育として実施する各講座の受講者数の目標値を大きく上回るとともに、受講者アンケートの目標値を上回ったため。

(5) 国際交流の推進 (年次計画15-1)

- コロナ禍収束後の国際交流の機会拡大に向けて、留学フェア等への積極的な参加により、海外協定校の開拓に取り組んだ結果、令和4年度末時点の海外大学との大学間交流協定締結数は90大学(目標値90大学)となった。
- 令和4年9月には、大学の世界展開力強化事業(インド太平洋地域等との大学間交流形成支援)(支援期間：R4～R8年度)に本学の『グローバルリーダー育成のための「女子大学発」実学型EDIプログラム』が採択され、令和5年度以降、本プログラムを通じた国際交流を推進することとした。本プログラムは、英国、オーストラリア、米国、カナダの指定する協定校への半年間の留学、英語によるインターンシップを含むプログラムに参加することで、EDI-公平性、多様性、包摂性を兼ね備えたグローバルリーダーを育成するものとなっている。

■ 海外大学との大学間交流協定締結数 (H22-R4)



■ 本学が採択されている大学の世界展開力強化事業のプログラム

Equity
Diversity
Inclusion

Practical EDI program originating from a women's university for cultivating global leaders



本プログラムを活用して、国際交流(学生派遣、留学生受入)を拡大予定

自己評価

評価結果【ii】(達成水準を満たしている)

【理由】海外大学との大学間交流協定締結数の目標値を達成したため。

【Ⅲ. 各分野の取組】

4. 大学評価・学校教育開発支援(1/2)

R4実績 の概要

- 大学と附属学校園との協働を通じて大学入学前からの総合知育成モデルを探究。
- 大学全体の内部質保証体制を構築。

(1) コンピテンシー育成開発研究所における取組 (年次計画5-1)

【キックオフシンポジウム】

- 令和4年12月にコンピテンシー育成開発研究所設立記念シンポジウム「時代が求める新しい学力 コンピテンシー育成の最新動向」(参加者約270名)を開催し、本学の取組や、コンピテンシー育成に影響を持つOECD及び他大学の先駆的な実践、コンピテンシー育成に関する様々な論点を共有した。また、各実践者・研究者の意見をもとに、今後のコンピテンシー育成の方向性等について議論を深めた。



■ キックオフシンポジウムの集合写真とポスター (R4.12)

【コンピテンシー測定ツールの開発に向けた取組】

- 令和5年度末までのコンピテンシー測定ツールの開発に向けて、OECDにより提案された「キー・コンピテンシー」、「変革をもたらすコンピテンシー」を踏まえ、そのうち批判的思考力など9つの資質を取り上げ、大学生への調査等を実施し、項目選定および信頼性・妥当性の検討を行った。

新たな価値の創造	対立やジレンマへの対処	責任ある行動
①批判的思考力	④他者理解力	⑦省察的思考力
②協働力	⑤問題解決力	⑧自己制御力
③創造的思考力	⑥対人葛藤解決力	⑨内的統制感

■ 本研究所で取り扱うコンピテンシーについて (9つの資質)

【附属学校園と連携した取組】

- 附属学校園の教員を対象に、コンピテンシー育成に関する教材開発テーマの公募を行い、7件を採択し、教材開発支援を開始した。開発された教材並びに指導案等は、令和5年度中に各校園主催の研究会や関連学会等で発表後、附属学校園教材・論文データベースに掲載し、広く普及を図る予定である。

自己評価

評価結果【ii】 (達成水準を満たしている)

【理由】大学生を対象としたコンピテンシー測定ツール、及び附属学校園と連携したコンピテンシー育成に関する教材開発が予定どおり進捗したため。

(2) 附属学校園における特色ある教育モデルの成果の発信 (年次計画19-1)

【附属学校園教材・論文データベース】

- 「附属学校園教材・論文データベース」を通じて、令和4年度に開発した授業案をはじめとする教材及び論文の掲出による成果発信と、他校での活用を促進するための各附属学校での公開教育研究会や学会等での周知活動を行った。令和4年度の新規掲載件数は79件(目標値55件)、利用者数は2,845名(目標値1,500名)となった。



【附属学校園におけるシンポジウム・セミナー】

- 附属学校園における特色ある教育モデル発信の取組として、計7件(目標値4件)のシンポジウム・セミナーを開催した。

自己評価

評価結果【iii】 (達成水準を大きく上回っている)

【理由】データベース、及びシンポジウム・セミナーに関する目標値を大きく上回ったため。

【Ⅲ. 各分野の取組】

4. 大学評価・学校教育開発支援(2/2)

(3) 大学と附属学校園の連携強化 (年次計画19-2)

- 附属学校園と大学が連携するオールお茶の水体制の下で、各附属学校園において、大学より教育実習生については102名(目標値100名)、インターンシップ生39名(目標値35名)を受け入れるとともに、附属学校園を活用した大学教員のFDを4回(目標値3回)実施した。FD参加者に対するアンケート結果においては、大学と附属学校の連携に関する意識向上及び授業改善に活かすことができたとする割合が86%(目標値80%)となった。



- 全ての附属学校園が大学と同一キャンパスにある特色を生かして教育研究を推進

自己評価

評価結果【ii】(達成水準を満たしている)

【理由】大学と附属学校園の連携強化に関する各取組について、目標値を全て達成したため。

(4) 大学全体の内部質保証体制の構築 (年次計画24-1)

- 第4期中期目標・中期計画の自己点検・評価の実施方針として、第3期中期目標期間までの国立大学法人評価の枠組みを活用して、総合評価室を中心に年次計画の進捗状況を管理し、自己評価書を作成するとともに、経営協議会学外委員による外部評価を受け、評価結果を法人経営の改善に活用・反映する体制を構築した。
- また、大学全体の内部質保証体制を見直し、内部質保証に関する基本方針、及び施設設備、学生支援、入学者選抜に関する自己点検・評価の実施要項等を整備し、本学における内部質保証体制を構築した。

自己評価

評価結果【ii】(達成水準を満たしている)

【理由】第4期中期目標・中期計画の自己点検・評価体制(外部評価含む)を構築したため。また、大学全体の内部質保証体制を見直し、関連規定を整備し、本学における内部質保証体制を構築したため。

国立大学法人お茶の水女子大学における内部質保証に関する基本方針 (R4.12.14制定)

① 中期目標・中期計画



② 施設設備



③ 学生支援



④ 入学者選抜



項目毎に「自己評価書」を策定することや、学生・卒業生等の関係者に「意見聴取」(アンケート等)を実施することを規定

学長戦略機構に設置された「総合評価室」が中心となり、学内の関係部署と連携して内部質保証(自己点検・評価を実施し、質の保証や改善・向上に取り組むこと)を推進していく体制を構築。

【Ⅲ. 各分野の取組】

5. 広報・学術情報(1/2)

R4実績 の概要

- 教育研究の成果と社会貢献の取組を多様なステークホルダーに対して積極的に発信。
- 情報セキュリティ意識の向上に向けた取組を推進。

(1) 高校生等に向けた広報活動の推進 (年次計画11-2)

【学部オープンキャンパス「OCHADAI OPEN CAMPUS 2022」】

- 令和4年度の学部オープンキャンパス「OCHADAI OPEN CAMPUS 2022」(R4.7.16~18)については、オンラインで学科・講座・コース別の説明会や在学生による相談会、新フンボルト入試説明会・合格者座談会、受験希望者が学長に直接質問できる「学長への質問コーナー」を開催し、合わせて約3,000名(延べ人数。令和3年度比約1,100名増)が参加した。また、3年ぶりに来場型によるキャンパスツアーを開催し、約840名の受験希望者が参加した。実施後のアンケート(総回答者数586名)では、「満足」との回答が81.4%であり、令和3年度のオープンキャンパス実施後アンケートにおける満足度(76%)を上回った。また、第3期中期目標期間、及び令和4年度におけるオープンキャンパスの実施状況について検証を行い、アンケート結果において、対面開催の要望が多く寄せられたことを踏まえ、令和5年度のオープンキャンパスについては、対面開催とすることとした。

【高大接続教育】

- 高大接続教育の推進による附属高校生の大学授業の受講者数は延べ83名(目標値60名)となった。

OCHADAI OPEN CAMPUS 2022 (R4.7.16~18)

オンライン (R4.7.16,17)



参加者が前年度比約1,100名増

- 学科・講座・コース別説明会
- 新フンボルト入試説明会・合格者座談会
- 学長への質問コーナー

×

オンデマンド (常設動画)



オンデマンドコンテンツを特設サイトに掲載(学長メッセージ、各学部・学科紹介、VRキャンパスツアー等)

×

対面方式 (R4.7.16~18)



来場型によるキャンパスツアーを実施し、図書館や音羽館を見学(約840名)

自己評価

評価結果 【ii】 (達成水準を満たしている)

【理由】 令和4年度の学部オープンキャンパスの満足度が、令和3年度の満足度を超えたため。また、高大接続教育の推進による附属高校生の大学授業の受講者数が目標値を達成したため。

【Ⅲ. 各分野の取組】

5. 広報・学術情報(2/2)

(2) 多様なステークホルダーに向けた広報活動の推進 (年次計画24-3)

- 第3期中期目標期間における教育・研究活動、及び社会貢献活動等に関する情報発信について、広報担当副学長と事務担当で、過去の実績を元に検証し、第4期中期目標期間における広報の方針として、①withコロナ時代の行事の対面再開、②創立150周年への(同窓生等からの)関心の醸成、③多様なステークホルダーへの情報発信、④魅力あるコンテンツへの強化の4点を進めていくこととした。
- 上記の他、産業界との連携強化に向けて、公的資金による研究開発の過程で生み出される各種の研究データについて、公開・非公開の戦略に基づいたデータ管理及び活用を促進するため、学内に設置したプロジェクトチームにおいて、アンケート結果の分析等の作業を進めた。

【方針①】 Withコロナ時代の行事の対面再開



ホームカミングデイ、大学見学を再開 (R4～)

【方針②】 創立150周年への関心の醸成



- 150年の歩み
- 150のメッセージ
- ご寄附のお願い

創立150周年特設サイトのオープン (R4～)

【方針③】 多様なステークホルダーへの情報発信



新たな試みとしてビジネス誌の有料広告を活用 (R4～)

【方針④】 魅力あるコンテンツへの強化



学報「お茶大GAZETTE」のリニューアル (R4～)

自己評価

評価結果 【ii】 (達成水準を満たしている)

【理由】 第4期中期目標期間における広報の方針に基づき、多様なステークホルダーに対して情報発信を行うことができたため。また、研究データの発信について、プロジェクトチームにおける作業が予定どおり進捗したため。

(3) 情報セキュリティの強化に向けた取組 (年次計画25-2)

- 令和4年度の文部科学省通知を踏まえ、本学のサイバーセキュリティ対策基本計画を改定するとともに、計画に基づく取組状況について自己点検・評価を行い、本学の情報セキュリティ体制についての必要な対策を行った。
- また、情報セキュリティに関する研修を年3回(目標値2回)開催し、大学構成員の情報セキュリティ意識の向上に繋がった。

自己評価

評価結果 【ii】 (達成水準を満たしている)

【理由】 サイバーセキュリティ対策基本計画を改定するとともに、取組状況について自己点検・評価を実施し、必要な対策を実施できたため。また、情報セキュリティに関する研修の開催数が目標値を達成したため。

【Ⅲ. 各分野の取組】

6. 産学連携・イノベーション・SDGs(1/2)

R4実績の概要

- サステナブル社会実装機構に設置されたSDGs推進研究所、湾岸生物教育研究所において、他機関と連携しながら、SDGsの達成に向けた教育研究活動を推進。

(1) THEインパクトランキングへのエントリー (年次計画3-1)

- 令和4年11月にSDGs推進研究所において、学内情報を集約し、「SDG3：健康と福祉」「SDG4：質の高い教育」「SDG5：ジェンダーの平等」「SDG17：目標達成のためのパートナーシップ」の4つのゴールにエントリーした。令和5年6月に公表されたランキング結果において、総合順位は「1001+位（全体1,705大学エントリー）」となった。ゴール別では、SDG3は「801-1000位」、SDG4は「1001+位」、**SDG5は「201-300位」**、SDG17は「1001+位」にそれぞれランクインした。



本学の実績（THEインパクトランキング2023）

SDG5：201-300位（国内の大学で第1位）

本学の目標：R9年度までにSDG5「600位以内」

自己評価

評価結果【iii】（達成水準を大きく上回っている）

【理由】THEインパクトランキングへエントリーし、SDG5における目標値を大きく上回る成果を上げたため。

(2) SDGs推進研究所における教育・研究、社会貢献等の取組の発信 (年次計画3-3)

【キックオフシンポジウム】

- 令和4年10月にSDGs推進研究所の設立記念シンポジウム「生活者起点で実現するSDGs」（参加者約380名）をハイブリッド方式で開催し、本学の特色である「生活者起点で実現するSDGs」について広く社会に発信した。後援は消費者庁、文部科学省、経済産業省とし、産学官の各界から来賓、講演者、パネリストを招聘し、学外に本学の取組を発信するとともに、学内外のステークホルダーとのパートナーシップ作りに取り組んだ。

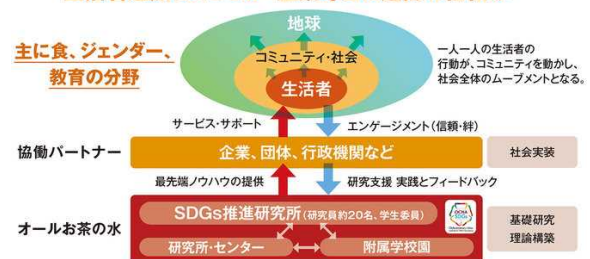


■キックオフシンポジウム（R4.10）には小池百合子東京都知事ははじめとする来賓、後援者、パネリストを招聘。

【企業等と連携したSDGs推進】

- 令和5年2月に「第1回企業連携OCHA-SDGsコンソーシアム」（5社参加）を開催し、参加企業からの話題提供に基づいて情報交換を行い、大学がハブとなったSDGsの達成や、次世代人材育成、起業家育成、大学・企業間にて連携したエコシステムの構築について議論した。また、各媒体（有料広告等）を通じて、本学のSDGs推進に関する取組を発信した。令和4年度の本研究所における**共同研究・プロジェクト数は2件（目標値1件）、外部資金獲得額は約350万円（目標値200万円）**となった。

生活者起点のSDGs～企業等との連携の仕組み



■SDGs推進研究所における企業等との連携の仕組み

自己評価

評価結果【ii】（達成水準を満たしている）

【理由】シンポジウムの開催や各媒体を通じてSDGs推進研究所の取組を発信するとともに、共同研究・プロジェクト数、及び外部資金獲得額の目標値を達成することができたため。

【Ⅲ. 各分野の取組】

6. 産学連携・イノベーション・SDGs(1/2)

(3) 湾岸生物教育研究所における【教育面】の取組 (年次計画3-4)

- 文部科学省の教育関係共同利用協定に認定されている湾岸生物教育研究所(千葉県館山市)において、「東京湾口の豊かな生物相の理解から海との共生を目指す教育拠点」として、国内外の大学・研究機関等と連携しながら、全国の大学・高校・中学校・小学校に対して、SDG14「海の豊かさを守ろう」の啓発に繋がる教育や海産生物の特徴を活かした生物材料としての海産バイオリソースの提供、体験活動の提供、実習の受入等を行った。
- この結果、令和4年度の(1)オーダーメイド型臨海実習の実績は、**11回・129名(目標値:6回・80名)**、(2)公開臨海実習の実績は**14大学・32名(目標値:14大学・20名)**、(3)高校生等対象のイベントの開催実績は、**12回・309名(目標値:9回・225名)**、(4)海産バイオリソースの提供は**225機関・18,131名(目標値:100機関・10,000名)**となった。



■日本財団「海と日本PROJECT」を通じた、海洋教育に関する各イベントや海産バイオリソースの提供も実施。

自己評価

評価結果【ii】(達成水準を満たしている)

【理由】湾岸生物教育研究所の教育面における取組の全ての目標値を達成したため。

(4) 湾岸生物教育研究所における【研究面】の取組 (年次計画3-5)

- 研究所周辺で大きく変化している海洋の環境について、周辺海域の生物相の調査を継続し、動植物の発生、進化、生態、保全に関わる研究を推進した。令和4年度は、新種の甲殻類の発見や、サンゴの変遷や幼生定着、温度や光環境の海藻への影響やその保全についての研究成果を論文や学会で発表する等の成果を上げ、論文発表数は**14本(目標値10本)**、学会発表数は**21件(目標値10件)**となった。
- また、令和6年度の国際シンポジウム開催に向けて、大学院生程度を対象にしてテーマ内容や講演者の候補を検討し、さらにリモート実習を発展させたワークショップの検討も進めた。

湾岸生物教育研究所における研究成果のプレスリリースの事例

プレスリリース事例①



■モデル生物「ハリサンショウウニ」の全ゲノムを解読しデータベースを公開 (R4.5.24)



プレスリリース事例②



■ゴカイ類の巣穴やホヤ類の体内をすみかとする新種のヨコエビを発見! (R4.10.27)

自己評価

評価結果【ii】(達成水準を満たしている)

【理由】湾岸生物教育研究所の研究面における取組の全ての目標値を達成したため。

【Ⅲ. 各分野の取組】

7. 事務の効率化・安全管理

R4実績 の概要

- 事務システムの効率化や安全管理の観点を含め、必要な業務運営体制を整備し、デジタル・キャンパスを推進。
- 今後発生が想定される自然災害に備え防災活動を推進。

(1) 事務システムの効率化等に関する改革方針に基づく取組 (年次計画25-1)

- 令和4年10月に「国立大学法人お茶の水女子大学における事務システムの効率化等に関する改革方針」を策定し、同方針に基づき、副学長（事務総括）の下、各課の職員で構成するプロジェクトチームを設置して、事務システムの効率化に向けた取組を推進した。この結果、令和4年度に、**改革方針に基づきデジタル化を行った業務数は12件（目標値10件）**となった。

改革方針に基づきデジタル化を行った業務の事例

【事例①】 給与明細・年末調整のペーパーレス化



- ・クラウドサービスを導入。
- ・教職員の利便性向上、人事労務課担当職員の負担軽減（約51時間）、源泉徴収票配付費用の節減（約30万円）。

【事例②】 財務会計業務の一部電子化



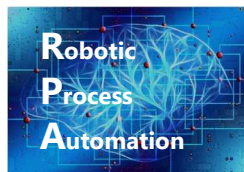
- ・財務会計システムの一部に電子決裁を導入。
- ・押印・対面・書面業務の縮小。
- ・伝票作成・ファイリングに要していた時間を約1割削減。

【事例③】 入試業務の電子化



- ・一般選抜の入試成績開示申請をインターネット上で行えるようシステムを改修。
- ・入試成績開示通知書発送業務に要していた時間（約48時間）の効率化の見込み（R5～）。

【事例④】 ルーティン業務のRPA化（自動化）



- ・RPAソフトとして、Microsoft社「Power Automate Desktop」を導入。
- ・事務部門の4件のルーティン業務をRPA化し、約10時間分の業務量を削減。

自己評価

評価結果【ii】（達成水準を満たしている）

【理由】改革方針に基づきデジタル化を行った業務数について目標値を達成したため。

(2) 防災活動の推進 (年次計画その他10-1)

- お茶の水女子大学防災計画に基づき、避難訓練・安否確認訓練（R4.4.25）、災害対策本部・自衛消防隊の訓練講習（R4.9.27）、安否確認訓練・通報訓練（R4.11.2）を実施した。また、年間を通じて、各附属学校園において避難訓練等を実施した。
- 東京都消防庁小石川消防署主催の自衛消防訓練審査会（R4.9.8）へ、本学事務職員により構成する「自衛消防隊」（2チーム）が参加し、1チームが準優勝、もう一方のチームは小石川防火管理研究会会長賞を受賞する成果を上げた。

※「その他計画」については、自己評価における評価結果の判定【i～iii】は行っていません。

【Ⅲ. 各分野の取組】

8. 進捗が遅れている取組の対応・改善策

第4期中期計画を踏まえて策定した「評価指標」及び「年次計画」に掲げられている取組のうち、総合評価室において「達成水準を満たしていない（三段階判定における【i】相当）」と自己評価した取組の対応・改善策について記載しています。

計 画	達成できていない、または進捗が遅れている取組	対応・改善策
【3-2】 (定性)	<ul style="list-style-type: none"> ● 第1回SDGs学内認知度調査（R5.2）を実施し、本学学生のSDGs認知度が、同年代の一般成人女性を上回っていることが分かった。しかし、本調査の実施にあたっての学内調整が進捗せず、評価指標【S3-2】に掲げている「SDGs達成に向けた学生/教職員の参画意識」を調査することができなかった。 ※評価指標【S3-2】では、SDGs達成に向けた学生/教職員の参画意識が令和4年度と比較して令和9年度時点で向上していることを目標としている。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 改善に向けた取組として、令和5年度には「サステナビリティ戦略会議（仮称）」を設置し、SDGsに関する全体構想を検討するとともに、SDGs推進研究所の課題や成果を踏まえた取組を実施し、全学体制でSDGs推進に向けた取組を展開していく予定である。 ● SDGs認知度調査については、調査範囲・期間、サンプル数の調整のための追加調査を行う予定である。
【10-2】 (定量)	<ul style="list-style-type: none"> ● 「数理データサイエンス・AI教育プログラムにおけるリテラシーレベル修了者数」について、毎年度の目標値を「50名」に設定していたが、令和4年度の実績値は「14名」であった。 ※評価指標【S10-2】では、令和4～9年度で計300名が上記プログラムにおけるリテラシーレベルを修了することを目標としている。 ※令和4年次計画【10-2】については、計画全体の進捗状況を総合的に勘案して、自己評価を【ii】（達成水準を満たしている）としている。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 改善に向けた取組として、リテラシーレベル修了者数の拡大に向けて、制度の周知徹底等を図っていくこととしている。また、令和4年度末時点で、カリキュラムの詳細や、必修科目の学生評価を踏まえた自己点検の結果を、文理融合AI・データサイエンスセンターのHPで公表している。
【12-1】 (定量)	<ul style="list-style-type: none"> ● 「大学院副専攻プログラム履修者数」について、毎年度の目標値を「72名」に設定していたが、令和4年度の実績値は「48名」であった。 ※評価指標【S12-1】では、令和4～9年度で計435名が上記プログラムを履修することを目標としている。 ※令和4年次計画【12-1】については、計画全体の進捗状況を総合的に勘案して、自己評価を【ii】（達成水準を満たしている）としている。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 改善に向けた取組として、プログラム履修者数の拡大に向けて、制度の周知徹底等を図っていくこととしている。 ● また、教育担当副学長、人間文化創成科学研究科長、教育企画室長をメンバーとした大学院教員推進WGを立ち上げ、具体的な対応・改善策の検討を進めていくこととしている。
【15-2】 (定量)	<ul style="list-style-type: none"> ● 「学部卒業時に留学経験を持つ学生の比率」について、毎年度の目標値を「24%」に設定していたが、令和4年度の実績値は「21.6%」であった。 ※評価指標【S15-2】では、「学部卒業時に留学経験を持つ学生の比率」が令和4～9年度平均で24%となることを目標としている。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 令和4年度卒業生（令和元年度入学生）については、コロナ禍の影響を最も強く受けた世代であり、海外渡航の機会が少なかったことや、円安、燃料費高騰のため海外渡航の負担が大きくなっていること等から、目標値「24%」の達成には至らなかった。 ● 一方、年度ごとの新規派遣学生については、令和3年度：約100件から令和4年度：約200件と増加傾向が見られた。令和5年度は、大学の世界展開力事業で奨学金付きの実渡航を開始することもあり、今後は「卒業時に留学経験を持つ学生比率」も更に回復することを見込んでいる。

【Ⅲ. 各分野の取組】

8. 進捗が遅れている取組の対応・改善策

計 画	達成できていない、または進捗が遅れている取組	対応・改善策
【15-3】 (定量)	<ul style="list-style-type: none"> 「学部卒業時に外国語力スタンダードを達成する学生の比率」について、毎年度の目標値を「20%」に設定していたが、令和4年度の実績値は「18.5%」であった。 ※評価指標【S15-3】では、「学部卒業時に外国語力スタンダードを達成する学生の比率」が令和4～9年度平均で20%となることを目標としている。 	<ul style="list-style-type: none"> 改善に向けた取組として、対面授業が再開されたことを踏まえて、外国語教育センターを中心として、語学検定試験対策講座の開催や外国語交流会の取組を拡充する等、学生の自主的な学習意欲を高める取組を継続し、目標値「20%」の達成を目指すこととしている。
【16-2】 (定量)	<ul style="list-style-type: none"> 「全学生に占める外国人留学生の比率」について、令和4年度の目標値を「12%」とし、経年で比率を向上させていくことを目標としていたが、令和4年度の実績値は「10.1%」であった。 ※評価指標【S16-2】では、全学生に占める外国人留学生の比率を令和4～9年度平均で14%以上とすることを目標としている。 	<ul style="list-style-type: none"> 令和4年度については、主な理由として、コロナ禍の影響により、私費研究生、大学院正規生、短期受入学生が減少したこと等から、目標値「12%」の達成に至らなかった。 改善に向けた取組として、令和4年度に採択された大学の世界展開力事業（インド太平洋地域等との大学間交流形成支援）（支援期間：R4～R8年度）を活用し、英語によるコースを開講することで、日本語を話せない留学生も受け入れられるよう抜本的な改革を行うこととしている。
【18-3】 (定量)	<ul style="list-style-type: none"> 「クロスアポイントメント制度利用者数（本学採用者）」について、令和4年度の目標値を「5名」としていたが、令和4年度の実績値は「2名」であった。 ※評価指標【S18-3】では、クロスアポイントメント制度利用者数（本学採用者）を令和9年度時点で10名以上とすることを目標としている。 	<ul style="list-style-type: none"> 改善に向けた取組として、令和5年度以降のクロスアポイントメント制度利用者（本学採用者）の拡大を目指し、令和4年度末時点で新たな受入3件について関係機関と折衝中である。
【24-4】 (定量)	<ul style="list-style-type: none"> 「THE日本大学ランキング（旧：THE世界大学ランキング日本版）」について、令和4年度の目標値を「25位以内」としていたが、令和4年度の実績値は「32位」であった。 ※評価指標【24-4】では、同ランキングについて、令和4～9年度の期間において毎年度25位以内となることを目標としている。 	<ul style="list-style-type: none"> THE日本大学ランキング2023について、本学は前回より7つ順位を下げた32位であった。当該ランキングは、(1)教育リソース、(2)教育充実度、(3)教育成果、(4)国際性の4分野で構成されており、(1)(2)(4)については前年度と同程度の順位であったが、(3)教育成果の順位が前回の51位から132位へと大きく後退した。この(3)教育成果は、①企業人事の評判調査及び②日本の高等教育機関研究者による大学の教育評判調査の結果である。 改善に向けた取組として、学長戦略機構会議にて現状の確認を行った。

以 上

国立大学法人お茶の水女子大学
令和4事業年度に係る業務の実績に関する
報告書の概要について

作成：企画戦略課（評価担当）

作成日：令和5年6月